

15. 座談「原爆被災と原爆研究」

長崎大学名誉教授 西森 一正

原爆被災前の長崎医科大学

長崎医科大学は古い歴史があり、医科大学としての評価は非常に高く、教官、学生、卒業生ともに非常に誇りをもっていました。学生とは言えば今と違って、地元出身者が少なく、全国各地から集まっていたので大変良かったし、クラス全体がユニークでした。私のクラスは約70名だったんですけれども、長崎出身者はたったの2名だけでした。地域でみると、第七高等学校（鹿児島）と佐賀高等学校の出身者が多かったんです。一番出身者の多い高等学校から総代を出すことになっており、佐賀高出身者は学生総代、七高が副総代というわけです。残念ながら、私の高知高等学校出身者は3名しかいませんでした。どこの大学でも定員80名でしたが、入学希望者は少なかったのです。私が入った頃は定員を満たさないという文部省の強い指示があったようで、だからわれわれは無試験もいいところです。応募者が80名の定員に足りないのですから、角尾晋学長が、「君は見たところ体もそう弱くもなさそうだから、よそに行かないで、ぜひうちに入るようにしてください」というのが、私の入学試験でした。

私は一応医学部を卒業してから心理学をやるつもりでいました。医者になる気は全くなかったんです。死んでも医者だけにはなるまいというのが中学からの希望だったし、私は高等学校の頃から心理学が面白くて、心理に行くことを決めていたんです。ところが、外国の心理学の本を読むと、大脳生理のことばかり書いてあるんです。心理学をやっていくためには大脳生理学をやらないとだめだと、その時は考えたんです。それで医学部を卒業してから心理学に進むつもりだったんです。いろいろ話を聞くと、もう一人同じようなのがいたんで、非常に気が合いました。このように私達のころは医者になるつもりのない医学生など、ユニークな学生気質がみられる時代だったと言えます。

また、講義を例にとってみますと、今時の講義風景は学生が座っていて、教官が教室から教えに行かないといけないですが、当時は学生が各教室の講義室に廻ってきたわけです。というのは、各教室が講義室と実習室を持っていたのです。病理学の講義や実習がある時は病理学教室の講義室、実習室に行きました。だから、昔は教授が一国一城の主という気が余計に強かったわけです。

シーボルト賞というのがあって、最終学年の学生がたった一人だけ選ばれて、賞をもらいました。ドイツ大使館からわざわざ来て、授与式をやったんです。それは、私ももらいたかったですね。シーボルト賞、学業が優秀な者たった一人だけなんです。最後にもらっ

たのが、私の2年上の鈴谷悦堂先生です。それからこの賞は戦争で中止になりました。

戦時中空襲があるので、われわれは交代で附属病院に泊り込んで患者を診ていました。一晩中徹夜した連中は朝からちょっと帰るとか、当番でいるんです。土曜日でも日曜日もないわけです。だから原爆の日も当番学生として大学に泊り込んでいた連中もたくさんいたわけです。というのはわれわれはある程度実際の医者と同じように患者を診ていたんです。臨床は教授と助教授と、あとは病弱の助手がいるだけで、一般の先生は戦争にひっぱられてしまったんです。それでも、患者はいるでしょう、だから私たちは学生でありながら4、5人の患者の主治医なんです。ちょうど原爆が落ちる1週間前の8月1日にも空襲を受けました。その時の空襲は、駅前まで車を待っている群衆と大波止で船を待っている群衆に寄襲射撃したんです。ひどいものです。負傷者がトラックで大学にどんどん運ばれて来ました。私はちょうど外科の卒業試験のときでしたが、試験どころではないわけです。2日ほど徹夜で手術の手伝いをしました。あちこち弾が入っているでしょう。腹切って、腸出して、弾で貫通しているところを探してそれを縫い閉じていきました。そんなものは学生するとき、ほとんどやったのです。今は学生が患者にメスを加えたら大変な問題になるのですが、そのころは全部許されたわけです。だって医者がいないんですから。5人も患者をもたされると、もう大変です。血液検査もみんな自分でやるわけです。自分の受持ちの患者にはつかないといけないし、勉強もしなければいけません。大変鍛えられました。調来助先生が、外科病棟を回ってこられた時に、「君たち、もう試験はいいでしょう」と言われたものでした。おかげで実際的なことはたいてい出来るようになって卒業したんです。ほとんどの医学生は卒業してすぐ兵隊に行かないといけないし、いきなり戦場に送られるわけです。そのためにも何でも知っていなければいけないし、出来なければいけないわけです。ですから、みんな学生の時に一生懸命何でもできるようにしていたわけです。

原爆被災

原爆の本に892名亡くなったと書いてありますが、これは昭和20年12月末日までに亡くなった人だけでなく、原爆を受けて卒業した人で、昭和20年よりももっと後で死んだ人も入れてあります。他の病気で死んだ人は入っていません。そのあたりは非常に難しいんですけれども最初行方不明でどうにもならなかった人も、後でわかった者は入れています。だから、昭和50年に再刊された「追憶—長崎医科大学原子爆弾犠牲者の霊に捧ぐ—」にはその後判明した方々の御芳名が犠牲者名簿に加えられました。

動ける人はすべて、被災者の医療活動をやっていたんです。たとえば、いち早く滑石に調教授が中心となって救護所を作られたのですが、学生もここに行って、いろんな手伝いをしながら、一方では行方不明の教授や学友を探しに行ったりしているわけです。教授の

遺体をまず探さなければいけないですし、多くの学友が死んでいるものですから、一生懸命遺体を探しに行ったものです。基礎教室では、ほとんど即死しました。私が附属病院で被爆し、即死を免れて伊良林の下宿で臥しているときに沢山の負傷者が私に診てくれと来ました。その中に基礎教室でやられた学生が1人来ました。来た時は、もう放心状態でした。私はその時、どんなことがあっても生き延びたいと思いました。基礎教室の建物はほとんど木造で、鉄筋で今残っているのは、現在の生協のあるところで、あれは図書館の書庫でした。生化学の実験室は丁度今の原爆資料センターの玄関の前方にあたる場所にあり、最近まで熱研の資料室として使われていました。死因の大部分は建物の下敷きです。ちょうどマッチ箱をハンマーで殴りつぶしたと思えばいいです。基礎教室はそれくらいやられたんです。あの中で即死しないで生き延びた人は相当運がいいと言えましょう。しかし、数日後には結局は死んだのですが。放射線は恐らく瞬間受けていますけど、むしろ、外傷、圧傷による死亡が多かったと考えられます。というのは、放射線だけではいくら被曝してもその場で死なないでしょう。95%はその日に死んでいますから、圧死というのが本当でしょう。無傷の人が一週間ほどして死ぬようになり、変だと思いだしたわけです。放射能がそういうふうに影響があるなんて、われわれは全く知りませんでしたから。滑石の救護所では血便が出だしたものだから赤痢が出始めたというので、部屋の片隅に隔離しました。

被爆後の町並みの印象は、これはおそらく直接原爆を受けた人は、一生残っていると思います。強烈な印象です。たいていのことは忘れるものです。私も何回か死の危険に会いましたけど、あんまりよく覚えていません。だけど、原爆のことだけは忘れようと思っても、忘れられるものじゃありません。おそらく死ぬまで鮮明に覚えているでしょう。だから未だに附属病院前のあたりが目の前に浮かんで来るんです。バタバタと倒れていたものも、衣類も全部ふっ飛んで、丸裸になっていたひとたちもいっぱいいたんです。それほど爆風が強かったし、もっとも夏だから非常に薄着だったんです。私も被爆した時は白衣の下にシャツは着ていなかったんです。大波止から大学まで歩いてきたので、汁びっしょりになっており、シャツは脱いでその辺りに掛けて干して、裸の上に白衣を着ていました。だから白衣に沢山の血がついたのです。残念なことに私は午後1時半くらいから5時くらいまでの間の記憶が全くないのです。穴弘法のあたりで約4時間くらいの間、出血多量で失神していました。だんだん意識が戻ったのは、おそらく火の気を感じて、温かくなったからじゃないかと思います。一面が火の海と言ってよかったですでしょう。私は基礎教室がバァッと燃えているのは覚えているんです。その時にあれで成績も全部焼けてしまったなあと思ったものでした。36名死亡して、生き残り32名くらいですから、皆がおれは少なくとも30番以内で卒業しているなというわけです。生存した同級生は遠くの下宿にいた人とか、

休学していた人とか、いろいろです。

原爆を経験した当時の学生は人生観が大きく違っていきました。われわれは一瞬死ぬかもわからない状態に生きていたわけです。

被災後の大学再建

当時、各大学に中学校からいきなり入る臨時附属医学専門部というのが作られました。これは軍医が必要になって作られたものです。よその学校はもっと後年までありましたけども、原爆で壊滅状態にあった長崎は昭和22年一番先に廃校になったわけです。医専が廃校になって特設高等学校というのを作られました。これが長崎高等学校です。存在したのが数年、昭和25年に廃校になりました。本当にうたかたの高等学校です。それだけではなく、文部省は長崎医科大学をほとんど廃校の方針にしていたんです。大学の壊滅で立直ることはできないだろうと判断したからです。学生は入ってくるが、教える人がいないということで、長崎医科大学は廃校の方向にほとんどいっていたんです。それが占領軍に存続させてもらったんです。当時は占領下ですから、すべてがマッカーサーの指令一つで動きます。それで、進駐軍に近い人に頼んで、文部省を納得させるように働きかけたのは国友鼎先生（大正12年4月1日から昭和12年3月31日まで解剖学第一講座教授）です。国友先生はそういう意味でもものすごい恩人なんです。原爆の時はどこかに一時出ておられて助かられました。われわれの学生のときはもう退官されていましたし、時々解剖教室には出て来られることもあったのですが、われわれのクラスの者はほとんど知らないんです。国友先生の御長男（国友昇先生）が台北帝国大学で眼科の教授をされていたんです。終戦後引揚げてこられて、新興善国民学校に開設した仮の附属病院で、外来を全部診てくださったんです。何の辞令もなく、お手伝いしましょうというんで。お父様からのご希望もあったからでしょう。私は先生から外来を習いました。

大学をどうにかしなければいけないということで9月には大学再興が議決され、進駐軍の許可を得て、10月、大村の元海軍病院（現国立長崎中央病院）を借りて講義を始めたわけです。大村ではあまり長くなかったです。退去命令が出まして、泣く泣く、昭和21年5月、諫早の元佐世保海軍病院諫早分院、今の健康保険病院のあるところへ病室および基礎教室が移ったのです。どうして大村から出ていかなければいけないのか、その時分、われわれにはわかりませんでした。そこはバラックの建物で、最初蚕の繭を入れるところだったんですが、一時、軍が臨時的な救護所に使っていたわけです。私の卒業式は諫早でやったんです。というのは3年で卒業試験は終わっていたけれども、また旧制に戻って4年になったわけです。私は1年余分にいたわけです。要するに昭和20年9月に卒業すべきものが、元の制度に戻って21年9月卒業になったのです。それで昭和21年9月に諫早のオンボロ建

物の中で、生き残り32名が集まって、卒業式なるものを行ないました。教授は生き残りが3名、そしてそのときすでに発令されてよそから来られた友永得郎教授（法医学）と頼尊豊治教授（生化学）などが加わって5人くらいの教授の参列で卒業式をして、卒業証書ももらいました。その時の卒業のお祝いのごちそうが蒸しイモ2つで、それが最上のごちそうだったのです。その後、大学が浦上に戻ることが決って、着々と復興の兆しがありました。昭和22年には附属病院の補修が完了し、9月には基礎教室がそこに移り、いよいよ大学再建が本格的にスタートしたのです。

原研、原爆資料センターの設立

原爆後障害医療研究施設（通称：原研）開設のいきさつは、その立場になかったからよく知らないんです。私の知るところでは、原爆の研究をすべきだという動きが広島で起こってきたわけです。原研に関しては、長崎は全部まねばかりしてきたように思います。広島がこうだから長崎も、と全部二番煎じです。私は「二都物語」と言っています。広島が作ったから長崎にも作らないといけないと。だから出来たのも遅いし、スケールも小さい。同じような格好で出来ているわけです。広島は医学部の教授をしていた渡辺漸さんという病理学教室の人が、「ぼくが作る」と言って、原医研に移ったんです。そして、たった2部門ですが研究所を作ったわけです。その時に長崎から引っぱられたのが朝長正允先生です。普通研究所と言ったら少なくとも7、8部門ないと研究所にならないけれども、たった2部門で研究所になったわけです。広島で何部門か出来始めて、やっと長崎にも原研を作らないといけないと言い出して、その後一部門ずつ出来ていったわけです。だからこれは後手後手です。

原爆被災学術資料センター（通称：原爆資料センター）については、まねじゃなくて広島と大体同じ調子で出来たんです。学術会議が東京、広島、長崎に大掛かりなものを作ろうという案が総会で通ったんです。初めどこに所属させたらいいのかわかりませんでした。文部省なのか、あるいは厚生省なのか。一応文部省に持って行ったら、蹴られたわけです。学術会議の総会で通ったものは大体通すらしいんですが、結局通らなかったのです。その代わりに、広島と長崎に原爆資料センターを作ることで学術会議の申請に対する代替にしようということになりました。だから広島と長崎には一緒にできたんです。最初定員が11名です。文部省が「11名という人員を一回でつけることは難しいので、2、3年に分けてつけていいですか」と言ってきたので、「それは結構です。2年かかろうと、3年かかろうといいですから」と答えましたが、2年で希望を満たしてくれました。

原爆研究

原子爆弾後障害研究会が始まったのは、厚生省の「われわれが原爆医療行政をするための資料としての会を開いてくれ」と言うことだったんです。普通の学会と形式はぜんぜん違う。初めは課長クラスが出で来たんですが、その次は局長になって、最近はずんずん出て来なくなりました。毎年開催していくうちに、最初の目的とはかなり違った会になってしまったような気がします。それよりも何年かに1回くらいにして、原爆に関する内容にする方が、初期の目的からいえば良いと思います。10年も前に、「研究会の開催は5年に1回くらいでいいじゃないですか。そしてまとまった内容のものをやりましょう。」という案を出したわけです。5年でなくても3年に1回くらいでもいいかもしれません。広島の方もそれに同意したんです。ところが、結局はずるずるとなり、その案がつぶれてしまったんです。私は毎年やる必要はないと思います。原爆20年の時に研究会で「原子爆弾後障害20年のまとめ」というのをやったんです。ああいうまとめの方がむしろ良いとは思っていたわけです。だから原爆30年の時は「30年のまとめ」をしたらどうかと提案したんです。毎年開催すると原爆に関係しないような演題が出て、どこでセレクトするか難しくなります。

これはまだだいぶ先のことですが、原研の将来構想を考える必要があると思います。基礎的な良い研究をやらないといけない。昔、私と朝長先生の二人だけで考えていた構想は、血液研究所にしようということだったのです。全国見回しても血液に関する研究所はないんです。広島が癌をやっているから、長崎では血液をしようということのを頭に置いた。当時、朝長先生が血液の第一人者でもあったから、血液を中心とする研究所という看板でやれるのではないかという話を二人でしていたんです。残念ながら、私は血液のことはわからないから、血液を入れる器、血管をやりましょうということでした。生理、生化学、病理、遺伝、放射線、臨床のすべての部門が血液に関係してくるわけです。朝長先生が亡くなり、この構想も結局は消えてしまいました。当時は朝長先生を旗頭にすれば十分それでやっていけると思っていました。いずれにせよ、今後の原爆に関する研究を含めた原研の在り方は今からの人が考えてくれないといけないことだと思います。

原爆資料センターの将来はそれほど違わないと思います。今までのことを積んでいく以外にないでしょう。方法論は別として、方針としてはデータをしっかり保存するしかないと思います。原爆資料センターは、研究所ではないから、研究が主というより調査・整理・保存が中心ですから相当な努力が必要となってくるでしょう。この資料は世界唯一のものとして、多くの人々に利用されるべきものでしょう。

(これは昭和62年1月14日に西森先生を囲んで奥村、岸川、三根が聞いたときの録音をもとにまとめたものである。)

西 森 一 正 先 生 略 歴

- | | |
|----------|---|
| 昭和17年10月 | 長崎医科大学入学 |
| 昭和20年 8月 | 外来実習中原爆被爆
(その時着用の血染めの白衣は原爆
資料センター展示室に展示) |
| 昭和21年 9月 | 長崎医科大学卒業 |
| 昭和22年12月 | 長崎医科大学助手 (第二病理)
講師, 助教授を経て |
| 昭和39年 8月 | 長崎大学教授 (原研病理部門)
この間, 原爆資料センター長及び
同センター病理部門主任を併任 |
| 昭和61年 3月 | 停年退官
長崎大学名誉教授 |